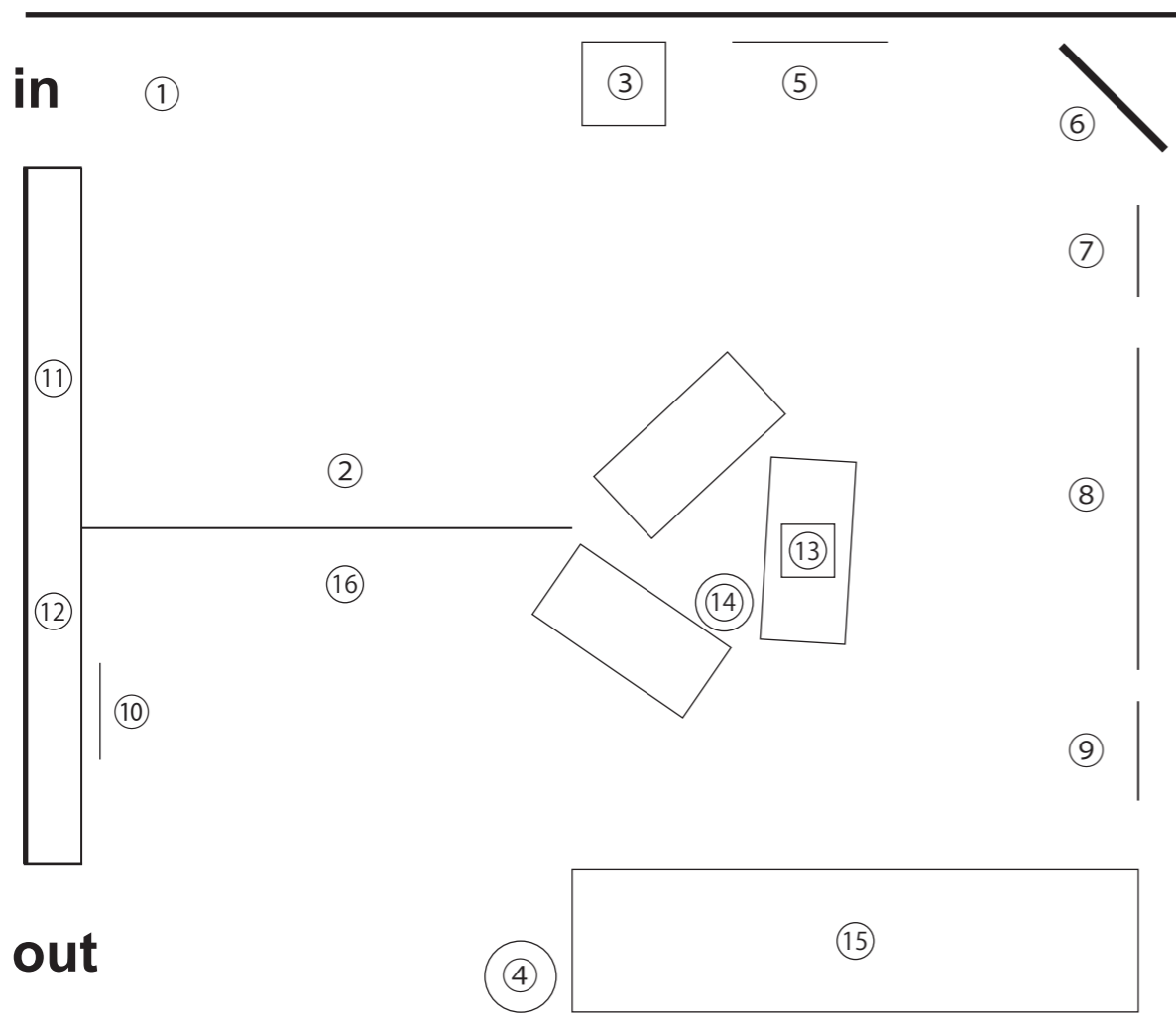


NEWTOWN2018

『SURVIBIA!!』

「EXPO-SURVIBIA」



- ① 人工代謝
秋山佑太
インスタレーション
(床と壁そして積み上げられた石膏ボード)
2018

部屋の床や壁を覆っているのは、本来の役目を失った石膏ボードである。ケヴィン・リンチ著『廃棄の文化誌』にて、彼は「廃棄された場所は絶望の場所であるが、廃墟と同じく、多くの魅力がある場所でもある。さまざまな管理から解放され、自由な行動と空想を求める豊かさがある。」また「新しい物・新しい宗教・産まれたての弱いものを保護する場所でもある。それは夢を実現させる反社会的行為の場所で、探検と成長の場所である。」と言った。廃墟や廃棄物が社会のヒエラルキーの底辺にあるという意識に働きかけ、廃棄された空間を解放し、今まで見たことが無い風景を立ち上げたのがこの部屋である。

- ② バリー・トゥード in ニュータウン—エキスポ—
中島晴矢
映像 22' 45"
2018

《バリー・トゥード in ニュータウン》シリーズ最終章。日本ニュータウン界の王道マツト、大阪・千里ニュータウンにレスラーたちが遂にリングイン！ マスクド・ニュータウンとバビロン石田の遺恨マッチ決着戦。田園都市線沿線、多摩ニュータウンと郊外を転々としながら繰り広げられてきた終わりなき闘いに、いよいよ終止符が打たれるのか。団地、モノレール、ショッピングモール—わざわざ大阪まで遠征して映し取られた入れ替え可能な風景のもと、「太陽の塔」が鎮座する万博公園の磁場へと引き寄せられる若獅子たちの末路とは……！？ 岡本太郎が目を疑い、メタボリズムが滞る。2018 万国プロレス博覧会、近代茶番劇のハードコアを見届けよ！

- ③④ ROC
佐久間洸
コンクリート、ぬいぐるみ
2018

「人類よりも彼らの残した遺産の方が永遠性をもっている」というSF的な着想から制作されたコンクリート彫刻シリーズ。堅牢なコンクリートとは相反するフラジャイルなビジュアルは、到達すべき場所を見失った発展について私たちに問いかけてくる。

- ⑤ ファミリア
FABULOUZ (佐久間洸+間庭裕基)
インクジェットプリント、アクリルマウント
2018

人々の生活の集積が街を形作るとすれば、あらかじめ環境だけが用意された新しい(形態)の街はどのような道をたどるのだろうか。教会という共同体を中心に持たない日本のニュータウンで familiar な母子の家族写真を撮影し、占うことにした。

- ⑥ STRANGER
間庭裕基
映像 47' 56"
(prologue 1' 46" / 1.civilization 6' 51" / 2.decadent 10' 20" / 3.urheimat 23' 15" / epilogue 5' 44")
2018

ニュータウンやメタボリズム運動が目指したユートピア。では、そこに暮らす人々は何を希求するだろうか。そう考えた時、私はソ連の映画監督アンドレイ・タルコフスキーの『NOSTALGHIA』で描かれた、過去への郷愁ではなく、はぐれた風景としてのノスタルジア(原郷)を思い出す。人の意識構造を純度の高い人工都市にある集合住宅に託し、そこに暮らす彼らの無意識な欲望と映像と身体の関係性を問うことにした。

- ⑦ Subimage (享楽植物園 6)
石井友人
Oil on canvas
72.6×53cm
2018

- ⑧ Subimage (享楽植物園 9)
石井友人
Oil on canvas
227.1×162cm
2018

- ⑨ Subimage (享楽植物園 1)
石井友人
Oil on canvas
116.5×80.3cm
2018

- ⑩ Subimage (享楽植物園 4)
石井友人
Oil on canvas
100×72.8cm
2018

⑪ Subimage (享楽植物園2)

石井友人

Oil on canvas

41×53cm

2018

⑫ Subimage (享楽植物園3)

石井友人

Oil on canvas

80.3×65.2cm

2018

テーマは、人工空間における人間と自然との相互領域の下部構造を感じ取ること。人工空間の中で管理される自然物をモチーフにした絵画、本展出品作ではショッピングモールにおける、観葉植物の鉢植えを描いた。巨大な消費空間の中の観葉植物は、人間と人間ならざる生きものの、不思議な調和的關係性が感じ取れる。全てを飲み込んでしまうかの様な人間の欲望の能動性と受動性が、他性を通じて、ここには同居していると思う。

⑬ Cube of building materials

秋山佑太

彫刻(石膏ボード等の建築資材をブレンドして成型したキューブ)

2018

自分の暮らす建物がどんな素材や建材で出来ているか知っているだろうか。食べ物となると素材の産地や生産のプロセスに敏感になるが、都市空間は公私問わずインフラとして我々の監視を逃れてきた。効率なき建設はまずあり得ない。ここにある崩れたキューブはそんな都市の屑から生成された出来損ないの彫刻である。

⑭ Cooking the building

秋山佑太

ビデオ・インスタレーション

(iPadによる3つのシークエンスと三脚とレーザー機)

2018

戦後に作られた効率優先の都市開発は役目を終えた。不要になった土地や建築資材は、どの様に新たな役目を獲得するのだろうか。戦後の都市開発の多くは、土地の収益を最大限に拡張して行くことこそ、恒久的な街だと信じて設計されてきた。しかし多くの街は限界値まで栄え衰

退していく。そして、都市空間に集められた資材は次なる土地へと移動し、建設され続ける。建設行為を料理と捉え、ブルーカラーでもホワイトカラーでも無い、家庭の労働である家事として、建材を調理した記録映像である。

⑮ 写真の山(仮称)[資料]

原田裕規

推定およそ10,000枚の写真ほか、サイズ可変
2017年-現在

*ご自由にお手にとってご覧いただけます。

ここに集められている写真の大半は「捨てられるはずだった写真」である。そのほとんどは千葉県松戸市から埼玉県三郷市にいたる郊外で回収されたものだ。

そもそものきっかけは、清掃業者や産廃業者らによって日々回収されているゴミの中におびただしい数の写真が含まれており、引き取り手もなく捨てられているという話を聞いたことだった。実情を確かめたくなり、数多くの業者を訪ね歩いてみたところ、実際はゴミとして捨てられているものの中から売れるものと売れないものが選別されており、前者は市場に出され、後者は廃棄されていることがわかった。そこで、許可を得て捨てられる写真を引き取ることになった。

そうして、一度は廃棄されるはずだった写真を回収した当初は、一枚一枚をきちんと小袋に分け、分類し、ナンバリングを施し管理していた。しかし、協力してくれる業者が増え、引き取る写真の量が増えていくにしたがって、作業は限界を迎えるようになった。

その結果起きたことのひとつは、自らの身体の変容である。

これらの写真は、その回収の経緯から、多くの故人の姿を収めていると考えられている。その中でも20世紀に生まれて近年亡くなった人々は、生まれてから亡くなるまでのほぼ全年代にわたって物理的なイメージがのこされることになった稀有な世代である。そうした人々の全イメージを、写真を通じて追体験しているうちに、その人の存在が脳裏に焼き付き、知らない人が夢に出るようになった。

ところで、アートの文脈で「ファウンド・フォト(発見された写真)」と呼ばれる手法がある。これは、芸術以外の目的で撮影された写真を芸術的な観点から「発見」し、それが置かれる文脈を書き換えることによって、写真の見え方を変えてしまうという手法である。その結果「芸術作品」という視座は得ら

れるかもしれないが、その代償に、第三者の内面に焼き付いてまでこの世に残存してしまう人間の存在感は失われてしまうことだろう。

しかし、この写真の山はそれとは反対に、ある時代の日本の郊外で生きた人間の存在感を今に伝えている作品未満の何かなのである。

⑯ 日陰の太陽

キュンチョメ

映像

2015

誰もが知っている「太陽の塔」

太陽の、という名前がついているが太陽が描かれているのは実は裏側だ。表面のパワフルなイメージからは想像がつかないほど背面の黒い太陽は不気味だ。そのうえ裏側は北向きなので、この黒い太陽には一日中まったく陽が当たらない。日陰の黒い太陽を背負う太陽の塔は、まるで絶望を背負った人間の姿にも見えた。私たちも太郎もみんな、この黒い太陽を背負っているのかもしれない。太陽を一度も見た事がない日陰の太陽に、太陽を見せたいと思った。